

令和元年5月28日現在

機関番号：27101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02130

研究課題名(和文) 20世紀フランス宗教哲学における二元論的思潮の研究

研究課題名(英文) Research on dualistic trends in twentieth-century French philosophy of religion

研究代表者

伊原木 大祐 (IBARAGI, Daisuke)

北九州市立大学・基盤教育センター・教授

研究者番号：30511654

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、1960年代以後に優勢となるフランス現象学思想の一群(レヴィナス、アンリ、マリオン)を宗教哲学の高度な発展形態と捉えつつ、そこに表れた二元論的構成に着目することで、20世紀におけるフランス宗教哲学への新しい見方を提唱している。その結果、この思潮が形を変えながらショーペンハウアー哲学や20世紀のドイツ・ユダヤ思想にまで及んでいることを発見すると同時に、現代におけるマルキオン主義の政治的ラディカリズムを確認することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

世俗的領域と超越的領域との対立・緊張関係に基づいて組み立てられた二元論的思考は、各種宗教思想を構成する決定的な要素であるが、哲学的見地からは「止揚」される(総合的に解消される)傾向にあったため、理論として尊重されてきたとは言いがたい。本研究では、20世紀を中心とした現代フランス哲学・現象学の多様な資源を活用しながら、その新しい哲学的意味づけを試みている。最終的には、あるタイプの宗教哲学的二元論が世界性(物質性)との対決というモチーフにおいて、明確に社会的かつ政治的な意義を帯びてくる点に注意を促している。

研究成果の概要(英文)：This research was undertaken in order to propose a new approach to twentieth-century philosophy of religion by attaching importance to dualistic elements in a school of contemporary French phenomenology (Levinas, Henry and Marion), which had been increasingly predominant after 1960s. The results indicate that, in terms of religious dualistic ideas, the French phenomenological thought is comparable with Schopenhauer's philosophy and twentieth-century German-Jewish thought. This study will also contribute to a better understanding of what can be politically symbolized by modern revival of Marcion's dualism.

研究分野：宗教哲学

キーワード：現象学 キリスト教 グノーシス ユダヤ思想 マルキオン 出来事 生

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

シモーヌ・ヴェイユと共に哲学者アランに師事した思想史家シモーヌ・ペトルマンは、戦後刊行された学位論文の序文「哲学および宗教の歴史における二元論」(1946)の中で、歴史上の二元論思想を「大いなる一元論的総合」よりも「独創的」と評している。思想の進展を見ると、二元論はたいてい一元論によって乗り越えられ、最終的には淘汰されてゆく運命にある。けれども、後から登場した総合的理論は、かつて二元論が有していたはずの新鮮さを失い、二項間の劇的な緊張関係を解消してしまっている。「総合」は別の角度から見れば、対立の隠蔽ないし曖昧化という欠陥を抱えているのである。ところが、一般の思想史においては多くの場合、逆に二元論の方こそが、不十分で欠陥をもった理論、それゆえ何か乗り越えられるべき障壁であるかのように見なされてきた。

その中であって、1960年代以降に転回を遂げたと言われるフランス現象学思想の一群が、従来の伝統的形而上学を脱した立場から、きわめて二元論的な理論構成に傾斜しているという事実は興味深い。たとえば、エマニュエル・レヴィナスにおける「同と他」や「全体性と無限」、ミシェル・アンリにおける「超越と内在」もしくは「世界と生命」、ジャン＝リュック・マリオンにおける「偶像とイコン」といった典型的な二分法がそれである。以前の研究で明らかになったのは、この二元において後者に位する術語がすべて、既存の枠組みを乗り越える対立的契機として導入された新たな概念装置になっているということである。中でもレヴィナスとアンリに見られる二元論の共通性は、それが古代グノーシス主義における救済論に酷似した思考プロセスを辿るという点にある。この点に注目した数少ない研究として、J・マテルンのレヴィナス論「逆向きのグノーシス 存在から異邦の創造神への逃走」(2004)とJ・アテムのアンリ論『救い主と存在の臓腑 グノーシス主義とミシェル・アンリについて』(2004)があり、研究代表者自身も導入的役割を果たす論考「レヴィナス、アンリ、反宇宙的二元論」(2013)を発表している。当該論考で示されたように、レヴィナスとアンリの哲学思想を宗教哲学的な二元論として捉えるのであれば、それをサルトルやメルロ＝ポンティなどのフランス現象学と同じ路線上に位置づけるよりもむしろ、ほぼ同時代を生きた別の宗教思想家たちとの比較において見直した方が、より説得力のある枠組みを構想できるのではないか。このような見通しが本研究全体の出発点となっている。

## 2. 研究の目的

研究の主要な目的は、1960年代を境に大きく変化したと言われる独創的なフランス現象学思想の一群(E・レヴィナス、M・アンリ、J=L・マリオンなど)を宗教哲学の高度な発展形態と捉えつつ、そこに顕著に表れた二元論的構成に着目することで、20世紀フランスを中心とした宗教哲学思想の再考、ないし理解の更新を図るというものである。具体的には、以下の二点を狙いとしている。

(1)レヴィナスは1952年発表の論考「聖書に抗するシモーヌ・ヴェイユ」の中で、ヴェイユ晩年のキリスト教神秘主義にも近い宗教哲学思想を批判し、自らのユダヤ教的な立場から独自の聖書理解を提示している。この論考を軸としてヴェイユの宗教思想に対する包括的考察を進めることで、宗教哲学的な見地からレヴィナスとヴェイユの係争点がどこにあるのか、また、ヴェイユ晩年の思想に映し出された二元論的構成の特徴がどのようなものであるのかを明らかにする。また同時に、レヴィナスをはじめとする20世紀ユダヤ思想に関する研究を推進し、その中から上記の二元論的思考に近接した発想を汲み出す。

(2)アンリは1963年刊行の『現出の本質』以降、後年の著作に至るまで、「超越」に対する「内在」の優位という明確な現象学理論を打ち出し、それを自ら「現象学的二元論」と名づけるに至った。この二元論は、19世紀末から20世紀前半にかけて活動したフランスのカトリック神学者リュシアン・ラベルトニエールがすでに提起していた二元論を現象学的に進化させたような形となっている。そうしたアンリの現象学思想とマリオンの神学的現象学的哲学とを比較検討し、両者における二元論的構成の異同を明らかにする。

## 3. 研究の方法

(1)レヴィナスの論考「聖書に抗するシモーヌ・ヴェイユ」を導きの糸として、ヴェイユ宗教思想の二元論的な核心を浮かび上がらせる。研究代表者はこれまでレヴィナスの思想に関して、『レヴィナス 犠牲の身体』(2010)以後、直近の成果である「レヴィナス、アンリ、宇宙的二元論」(2013)や「E・レヴィナス「エロスの現象学」における二元性の問題」(2015)などで、繰り返しその特異な二元論的構成について論じてきた。これらの研究資源を活用しながら、上記ヴェイユ論と同時期のテキストにも適宜目を配りつつ、レヴィナスによる批判の意図を抽出する。その作業を踏まえて、上記のヴェイユ論の中で参照されていると思われる実際のテキスト(『根をもつこと』・『カイエ1』・『ある修道者への手紙』)を検討し、それ以外にも晩年のヴェイユが集中的に書き残している複数の宗教著作を扱う。このような試みに関しては、すでに学会発表の形で予備的に行った作業「レヴィナスのヴェイユ批判は正当か?」(『宗教研究』第88巻別冊、2015年、222-223頁)の中でも着手されている。なお、この課題に対する補助になりうるものとして、ペトルマンの思想史研究『プラトン・グノーシス派・マニ教徒における二元論』、『分けられた神 グノーシス主義の起源』と同時に、その大著『詳伝シモーヌ・ヴェイユ』を援用しつつ、ヴェイユ的な二元論思想の意義と特性をその源泉にまで遡って探求する。とくに注目す

べきは、正統派神学によって葬り去られた二世紀の異端者マルキオンの思想との関連である。マルキオンに対しては、20世紀前半から半ばにカミュやE・ブロッホ、G・シュテルンのようなヨーロッパ知識人の間で再評価の機運が生じていたが、ヴェイユの二元論を考える上でも決定的な示唆を与えてくれる。そればかりか、マルキオンへの態度を一種のリトマス試験紙とすることで、20世紀ユダヤ思想における二元論的思考への親和性を判別することができると思われ

る。(2) アンリの主著『現出の本質』は、現象の諸条件に関する検討を行ない、「超越」と「内在」を厳密に区別することで成立する新たな現象学思想を構築した。晩年のアンリは、思想的な総決算の書というべきキリスト教三部作(『我は真理なり』・『受肉』・『キリストの言葉』)を通して、自らの現象学思想を「現象学的二元論」の名のもとに総括しつつ、これをキリスト教の解釈に応用している。そこで強調されるのは、超越に対応して脱自的構造をもつ「世界」と、内在に対応して情感的構造をもつ「生」との対照性であり、キリスト教における「生」の優越性である。このような二元論思想については、アンリに影響を受けつつも独自の神学思想から出発しているマリオンの現象学理論との比較によって、その特徴や問題点を浮き彫りにすることができる。たしかに、アンリ自身は『受肉』の中で、表面的には古代キリスト教の教父たちに加勢し、異端グノーシス思想を攻撃している。しかしながら、思想内容の実状は、敵手であるはずの異端的二元論と多くの側面を共有している。この錯綜した宗教史的問題については、以前の研究成果である「レヴィナス、アンリ、反宇宙的二元論」(2013)や「ミシェル・アンリの二元論とその実存的含意」(2015)の中で解明を試みてきた。他方で、マリオンにはこうした異端的構成を避けようとする強い動機があるため、それだけいっそう両者の二元論上の差異が際立ってくる。マリオンが「与えの現象学」のプログラムを提唱した著作『与えられると』を中心にこの問題を検討し、初期の神学的著作『偶像と距離』・『存在なき神』における明瞭な二元論的構成からの変形と再構成をそこに読み取ることによって、アンリ的な二元論の型とは異なる宗教哲学的思索の発展形を把握する。

#### 4. 研究成果

(1) 『別冊水声通信 シモーヌ・ヴェイユ』上に公表した翻訳「聖書に抗するシモーヌ・ヴェイユ」の解題内で、レヴィナスがヴェイユの聖書読解に見られる合理主義的価値観を危険視し、その背景にあるキリスト教プラトニズムが想定していた善悪二元論(純粋なる善である神と、力としての悪)を批判している点に着目しつつ、ヴェイユ思想におけるラディカルな異端主義の独自性を示した。その作業を経ることで、レヴィナスのヴェイユ論と、同時期に公表されたマルティン・ブーバーのヴェイユ批判(1951年「沈黙の問い」)との類似性・並行性を発見することになり、さらには現代思想におけるマルキオン主義の拡がりを確認することができた。口頭発表「マルキオンの二元論をめぐる所見 ブーバーとヴェイユ」では、マルキオンやグノーシス主義をめぐるブーバーとヴェイユの見解上の相違が、単に宗教的信条の問題というにとどまらず、政治的次元に深く関与していたことを明らかにしている。

(2) 上記から生じた予想外の成果が、論文「反逆のメシア エルンスト・ブロッホの宗教哲学」である。この論考は、日本宗教学会で他の研究者たちと共に企画・実施したパネル『二〇世紀ユダヤ哲学再考 政治と宗教のはざままで』内での発表がもとになっている。そこでは、初期ブロッホによるユダヤ性の自己省察が、上記研究でヴェイユ思想に見いだされたものと同種の「政治的」マルキオン主義へと発展してゆく過程を跡づけている。ブロッホにおける異端的神秘主義を捉える上でとくに効果的だったのは、同じく神秘主義に関心を寄せたブーバーとゲルシヨム・ショーレムの思想史的对立(グノーシス主義への賛否)を参照軸とし、これらユダヤ思想家との距離においてブロッホ哲学の独自性を把握する手法であった。こうして本研究は、20世紀フランス哲学から20世紀ドイツ・ユダヤ思想にまで検討対象を拡張し、二元論の問題設定の根深さと潜在的な創造性を展望することとなった。

(3) アンリの現象学的二元論を考察する中で、本研究課題にとってのショーペンハウアー哲学の重要性が明らかになった。アンリはショーペンハウアーを「歴史上最も重要な哲学者のひとり」と考えたが、これはフランス現象学の多様な展開においても例外的な評価であったといえる。その重要性は、まさしくアンリ現象学の二元論的構成に似通った思考体系がすでにショーペンハウアーによって提起されていた点にある。『意志と表象としての世界』で表明された「意志」と「表象」の区分は、もともとカント哲学に由来するものだが、むしろアンリ現象学における内在と超越、生と世界、実在と非実在、自己触発と脱自などの基本区分にそのまま合致している。両者の哲学の思わぬ接点については、論文「意志の中の情感性 ミシェル・アンリによるショーペンハウアー解釈」の中で詳述した。こうした観点からの研究ははまだ僅少といわざるをえず、現時点で一定の学問的意義があるのではないかと考えている。

(4) 論文「キリストの現象について ミシェル・アンリとジャン＝リュック・マリオン」では、アンリの現象学的二元論に基づくキリスト解釈が本人の意図にも関わらずグノーシスの傾向を帯びているという点、およびマリオンの現象理論がアンリ的な自己触発の議論を包摂しながらも構成上の観点から決定的に断絶している点を示した。具体的に言えば、アンリにおいては現象概念が二元論的で、かつ一方が他方を基礎づける関係にある(超越 内在)だけでなく、その基礎づける側の現象性(内在)すなわち「生」それ自体も内在的な基礎づけ関係(個体的生 絶対的 生)によって統制されている。この生内部の自己産出は完全に「自己原因」的な

構成をもっている。これに対し、マリオンの現象概念はそうした形而上学的要素を初めから除去し、複数の可能な現象性を並行的に呈示する形をとっている。その中でマリオンが重視する「飽和した現象」という概念は、「与えの現象学」の規準とはされているが、けっして他の現象性の根拠や原因としては機能していない。ここから生じる身体・エロス思想上の現象学的差異については、口頭発表「肉への二つのアプローチ　マリオンとアンリ」の中で論じた。

(5) 日仏哲学会での発表原稿をもとに、マリオンの「与えの現象学」とロマーノの「出来事論的解釈学」を比較した論文「出来事の現象学的地位　マリオン、ロマーノ、還元の問題」を公表し、その中で出来事概念に対する現象学的理解の異同を論じた。マリオンが出来事を飽和現象の一類型として位置づけるのに対し、ロマーノでは、出来事に最初から明確な優位性が付与され、それにもかかわらず、超越論的でない仕方でもそこから世界や自己の生起が説明されている。この概念は従来の宗教哲学的二元論を踏み越える可能性をはらんでおり、新たな宗教哲学の構築に貢献しうるものである。ここで得られた知見は、次期の研究「情動と出来事の現象学的相関についての基礎研究」へと継承されている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計5件)

伊原木大祐、「反逆のメシア　エルンスト・ブロッホの宗教哲学」、『基盤教育センター紀要』、査読無、第32号、2019年、1-18頁。<http://id.nii.ac.jp/1077/00000618/>

伊原木大祐、「意志の中の情感性　ミシェル・アンリによるショーペンハウアー解釈」、『実存思想論集XXX　ショーペンハウアーと実存思想』、査読無、第二期第二五号、2018年、81-99頁。

伊原木大祐、「出来事の現象学的地位　マリオン、ロマーノ、還元の問題」、『基盤教育センター紀要』、査読無、第29号、2017年、1-17頁。<http://id.nii.ac.jp/1077/00000553/>

伊原木大祐、「キリストの現象について　ミシェル・アンリとジャン＝リュック・マリオン」、『宗教学研究室紀要』、査読有、第13号、2016年、3-28頁。DOI: 10.14989/217679

伊原木大祐、「レヴィナス的倫理と共感の問い」、『基盤教育センター紀要』、査読無、第27号、2016年、1-18頁。<http://id.nii.ac.jp/1077/00000493/>

〔学会発表〕(計6件)

伊原木大祐、「肉への二つのアプローチ　マリオンとアンリ」、日本ミシェル・アンリ哲学会第十回研究大会、2018年。

伊原木大祐、「エルンスト・ブロッホとユダヤ性の問い」、日本宗教学会第76回学術大会、2017年。

伊原木大祐、「出来事の地位をめぐる　マリオン、ロマーノ、現象学の問い」、日仏哲学会2017年春季研究大会、2017年。

伊原木大祐、「マルキオンの二元論をめぐる所見　ブーバーとヴェイユ」、日本宗教学会第75回学術大会、2016年。

伊原木大祐、「仮現から逆説へ　「転回」後のフランス現象学から見たキリスト論の射程」、土井道子記念京都哲学基金主催平成28年度シンポジウム、2016年。

伊原木大祐、「共感　レヴィナスの思考より」、レヴィナス研究会・哲学/倫理学セミナー合同主催企画「レヴィナスと倫理学　ドイツ倫理思想との比較を通して」・第二部「共感」、2016年。

〔その他〕

(翻訳と解説)伊原木大祐、エマニュエル・レヴィナス「聖書に抗するシモーヌ・ヴェイユ」、『別冊水声通信　シモーヌ・ヴェイユ』、水声社、2017年、60-69頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

### (2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。